

月丘ナイル

（平成三十年五月号）

マニキュアを塗らない指で打診するあばらのすきまの扉の向こう

月のない夜には深く爪を切る小さな星を見逃さぬため

指先が冷えて冷えてという人の我よりいくらか温ぬくきその指

CTは事実を告げており我は「異常所見」の判を押ししたり

ここですと指したところを見詰める老眼鏡の奥の眼まなこで

眼鏡入れ出して眼鏡を入れ仕舞う十の乾いた指とねを見ている

できぬことばかりがふえる たとえばあなたを無邪気に励ますことも

指よりも滑らかに動くボールペン一号用紙に病名記す



●作者の言葉

ツイッターで短歌を詠みはじめてから四年半が経ちました。最初の頃は短歌そのものが新鮮で思いつくまま歌にす

る日々でしたが、心の花に入会し先輩方の歌を読むうちに私もただ手ざわりが良いだけではない、私自身を表現するような歌を詠みたいと強く思

うようになりました。

医師としても歌人としてもまだまだ未熟な身ではありますが、一人一人の患者と向き合い見つけ続けてきたこの世界のことを、これからは歌人として詠み続けていきたいと思つていきます。ありがとうございます。

●選者の言葉

今回の選者賞は月丘ナイル氏の五月号特選の連作とした。モチーフとして「指」が用いられ、医師としての内省的な心情がテーマとなつている。医師の指は、患者を診断するための大事な器官のはず、しかし最近、触診を受ける機会が少ないような気がする。改めて作者の医師としての心構えが示されているのだと感心する。マニキュアを塗らない、深く爪を切る等の修飾語に迷わされてはいけない。思慮深くテーマを構築しているのである。連作は一つのストーリーに沿って演出するのが通例だが、ここには確たる筋書はない。一人の患者との診察室での短い時間のみ、しかし背後には患者にも医師にも背負いきれない人生の重みがあると、テーマが絞られているのだ。